

学位論文内容の要旨

論文提出者氏名	論文審査担当者
山口 裕之	主査 教授 大道 正英 副査 教授 谷川 允彦 副査 教授 大槻 勝紀 副査 教授 芝山 雄老 副査 教授 上田 晃一
主論文題名 Clinical efficacy of conservative laser therapy for early-stage cervical cancer (初期子宮頸部癌に対する保存的レーザー治療の臨床的効果)	
学位論文内容の要旨	
<p>(研究目的)</p> <p>子宮頸部癌は女性性器癌の中でも頻度の高い疾患であるが、初期であれば完全治癒も可能である。従来から頸部円錐切除術は頸部前癌～初期癌の診断や治療目的に広く行なわれてきたが、その手法も従来のメスによる切除からレーザーやループ電極を用いた方法へと変化しつつある。凍結法や蒸散法と比較して、円錐切除術の最たる利点は浸潤深度や断端病変を正確に病理診断できることにある。これまでも我々は異形成から脈管侵襲のない微小浸潤癌に対するNd-YAGレーザー円錐切除術(レーザー円切)の有効性について報告してきた。近年、若年者の頸部癌罹患率の上昇とともに保存的治療の必要性がますます高まり、多くの施設で初期癌に対する円切が行われているが、その方法や治癒率は様々で必ずしも一定のコンセンサスが得られているとは言い難い。そこで、本研究では長期予後を追跡し得た多数例の後方視的解析から、頸部初期癌に対するレーザー円切による保存的治療法の妥当性とその限界を明らかにすることを目的とした。</p> <p>(方法)</p> <p>1983年から2003年に当院で治療した1207例の初期子宮頸部癌患者を対象とした。術前に上皮内癌と診断された752例および微小浸潤癌と診断された271例に対してレーザー円切を行った。全例に切除面の蒸散・凝固を加え、切除標本は8-16分割で最終組織診断した。また、術前に浸潤癌が疑われた184例に対しては根治術を行なった。全症例において術後病理組織所見ならびに予後を後方視的に検討した。</p> <p>(結果)</p> <p>レーザー円切を行なった1023例のうち、円切標本では異形成54例、上皮内癌663例、脈管侵襲を伴わないI a1期癌239例、脈管侵襲を伴うI a1期癌14例、I a2期癌14例、I b1期癌39例が検出された。不完全切除率は異形成54例中4例(7.4%)、上皮内癌663例中48例(7.2%)、脈管侵襲を伴わないI a1期癌239例中16例(6.7%)であったが、長期経過観察後の再発率は各々わずか1例(1.9%)、8例(1.2%)、4例(1.7%)であった。一方、レーザー円切標本で診断された脈管侵襲を伴うI a1期癌14例、I a2期癌14例、I b1期癌39例の計67例と術前に浸潤癌が疑われた184例に対して準広汎～広汎子宮全摘および骨盤リンパ節郭清を行った。その病理学的検討では、I a1期癌154例と</p>	

間質浸潤 4mm までの I a2 期癌 30 例においては、脈管侵襲の有無に関わらず骨盤リンパ節転移は認められなかった。しかし、間質浸潤 4mm 以上の I a2 期癌 16 例中 2 例(12.5%)と I b1 期癌 51 例中 9 例(17.6%)に骨盤リンパ節転移が認められた。

(考察)

頸部上皮内癌および脈管侵襲を伴わない I a1 期癌は、レーザー円切のみで十分治癒可能と考えられた。また、脈管侵襲の有無に関わらず間質浸潤 4mm までの I a 期癌では骨盤リンパ節転移を認めなかったため、保存的レーザー治療の適応となる可能性が示唆された。

審査結果の要旨および担当者

報告番号	甲 第 号	氏 名	山口 裕之
論文審査担当者		主 査 教授 大 道 正 英 副 査 教授 谷 川 允 彦 副 査 教授 大 槻 勝 紀 副 査 教授 芝 山 雄 老 副 査 教授 上 田 晃 一	
主論文題名 Clinical efficacy of conservative laser therapy for early-stage cervical cancer (初期子宮頸部癌に対する保存的レーザー治療の臨床的効果)			
論文審査結果の要旨			
<p>子宮頸部前癌病変や初期癌に対する保存的治療法として、円錐切除術は日常臨床でよく行なわれるが、上皮内癌から初期浸潤癌に対する本治療の臨床的有用性に関しては、未だ一定のコンセンサスが得られていない。近年の子宮頸部癌罹患者の若年化に伴い、妊孕性を温存する本術式の妥当性とその限界を明らかにすることは極めて重要である。本研究では初期子宮頸部癌において再発の危険因子である脈管侵襲と骨盤リンパ節転移に注目し、後方視的に保存的レーザー円錐切除術の限界を追求し、以下の結果を得ている。</p> <p>(1) レーザー円錐切除に伴う不完全切除率は異形成 54 例中 4 例 (7.4%)、上皮内癌 663 例中 48 例 (7.2%)、脈管侵襲を伴わない I a1 期癌 239 例中 16 例 (6.7%)であったが、長期経過観察後の再発率は各々わずか 1 例 (1.9%)、8 例 (1.2%)、4 例 (1.7%)と低率であり、本治療の効果の高さが伺われた。</p> <p>(2) 脈管侵襲と骨盤リンパ節転移に注目した病理学的検討では、I a1 期癌 154 例と間質浸潤 4mm までの I a2 期癌 30 例においては、脈管侵襲の有無に関わらず骨盤リンパ節転移は認められなかった。しかし、間質浸潤 4mm 以上の I a2 期癌 16 例中 2 例(12.5%)と I b1 期癌 51 例中 9 例(17.6%)に骨盤リンパ節転移が認められたことより、脈管侵襲の有無に関わらず間質浸潤 4mm までの I a 期癌が、保存的レーザー治療の適応となる可能性が示唆された</p> <p>本研究は子宮頸部初期癌に対する保存的レーザー円錐切除術の高い治療効果とその限界を明らかにしたものであり、その臨床的意義は非常に大きいものであると考えられる。</p> <p>以上より、本論文は本学大学院学則第9条の定めるところの博士(医学)の学位を授与するに値するものと認める。</p> <p>(主論文公表誌) International Journal of Gynecological Cancer 17: 1-5, 2007</p>			